

# 村上水軍の成立と消長

メモ) 鉄本 (2022.06.21)

中世の堺が経済的に発展する要因の1つに「日明貿易(勘合貿易)」があるが、その貿易ルートには、「応仁文明の乱」(1467年~1477年)と「村上水軍」の存在が影響を与えていると言われている。そこで、村上水軍の歴史について調べてみた。

【日明貿易】1401年(応永8)から1549年(天文18)まで19回行われた。1404年以降は勘合による貿易。1401年から1495年までは、室町幕府主体で行われたが、1509年以降は、大内氏又は細川氏主体で行われた。応仁の乱以降は、堺を本拠とする管領家の細川氏と堺商人、兵庫を本拠とする大内氏と博多商人が経営。1523年の細川氏、大内氏それぞれが派遣した遣明船の関係者間で起きた「寧波の乱」の結果、大内氏が権益を握った。1551年大内義隆が陶晴賢によって滅亡し日明貿易再開の見込みは絶たれた。

## 1. 「村上水軍」の初見(南北朝時代)

- ①能島村上家： 貞和5・正平4年(1349)東寺領弓削島荘(愛媛県弓削町)に幕府使節入部の際に「野島酒肴料」の名目で警固の費用を受領。貞治4・正平20年(1365)伊予守護河野氏の当主通堯(みちたか)を助け軍船で九州征西将軍懐良(かねよし)親王のもとに送り届けた。  
系譜：伝承では北畠師清(=顕成?)が村上義弘の跡を継ぎ、能島村上氏の祖となった。(「萩藩閥閥録」)  
村上山城守隆勝(宮内少輔)(1527年没) — 義忠(掃部頭) — 武吉 — 元吉
- ②因島村上家： 応永34年(1427)村上備中入道が第4代足利義持将軍から感状を受ける。翌年に備後守護山名氏から多島(広島県内海町)地頭職を与えられる。毛利氏の家臣団となる。
- ③来島村上家： 宝徳3年(1451)河野氏書状に来島城という記述。関ヶ原で西軍、その後、豊後に転移。

## 2. 海賊の4つの顔

- ①土着の海賊： 略奪者としての海賊。海上交通者から金品「礼銭(縄張り通行の謝礼)」を奪う。
- ②政治的海賊： 荘園領主や国家権力に抵抗する者。島の荘園を「押領」し領主から悪党と呼ばれた。
- ③安全保障者： 海上航行者は警固料を支払って、海賊を「上乗り」させることにより、無害航行が可能となる「東西の海賊相互間システム」があった。
- ④水軍としての海賊： 遣明船警固を幕府の命によって海賊が軍事的動員を行う。  
\*①と②は古代からの存在(平安期の藤原純友の例) ③と④は中世後期からのイメージ。

## 3. 瀬戸内海賊生長の要因

- ①海上交通の要衝と難所： 船折瀬戸=伯方島と鶴島に挟まれた幅約300mの水路。芸予諸島を東西に抜ける重要な航路で、航行する船舶から通行料を徴収。島全体を要塞化し「海城」とした。
- ②海産物の産地： 「塩の生産地」=芸予諸島。東寺領の弓削島は「塩の荘園」。塩など海産物を運ぶ海運業が発展。芸予諸島最大の海運基地は生口島の瀬戸田(尾道市)。
- ③大名権力の真空地帯： 中国側毛利氏、四国側河野氏の決定的な支配力が及ばなかった。

## 4. 能島村上氏の戦国期の立ち位置とその後

- ①細川高国(1484~1531)が村上隆勝(1500年頃の活躍、村上武吉の祖父)に塩飽島の代官職を付与。大内義興(1477~1528)が「予州国分山合戦」の戦功により村上隆勝に感状を与える。細川高国と連携して、大内義興の陣営に属するが、後に、子孫は河野通直(1564~1587)配下となる。
- ②元亀年間(1570~72)大友宗麟(1530~1587)とは同盟関係、来島・因島村上氏(毛利側)とは対立。
- ③各戦国大名とは等間隔の友好関係を築き、「海の大名」として独自の立場を保った。海上通航の通行料徴収権が能島村上氏の存立基盤であった。
- ④秀吉の海賊禁止令により天正16年(1588)村上武吉・元吉父子は小早川隆景の領国筑前「冠」に移住。

